伊勢參宮名所圖會 一

特1
274

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用

伊勢參宮名所圖會卷之一

目録

齋宮群紀　京三条橋
粟田口天王祭　青蓮院
十禪師祠　同辻の故事
佛光寺廟所　阿弥陀堂
鍛冶ゞ井　定雅ゞ荘旧跡
菅豊長亭粟田寺　粟田口寺旧地
日山神明　號上ゝ軒九躰町
日岡嶺　本食上人庵
天智天皇廟陵　御廟野
御陵川　薮の下
護國講寺　人康親王旧蹟
白川橋　粟田口
門出姪ゞ　金藏寺
牛頭天王祠　首藤刑部墓
定法寺旧地　鍛冶ゞ池
粟田口関白旧蹟　田村丸別業
粟田宮旧蹟　比丘尼坂
松坂　粟田山
義經ゞ幸松　山科
鏡山　御陵村
明王寺　安祥寺
毘沙門堂　奴茶屋

白井氏藏書

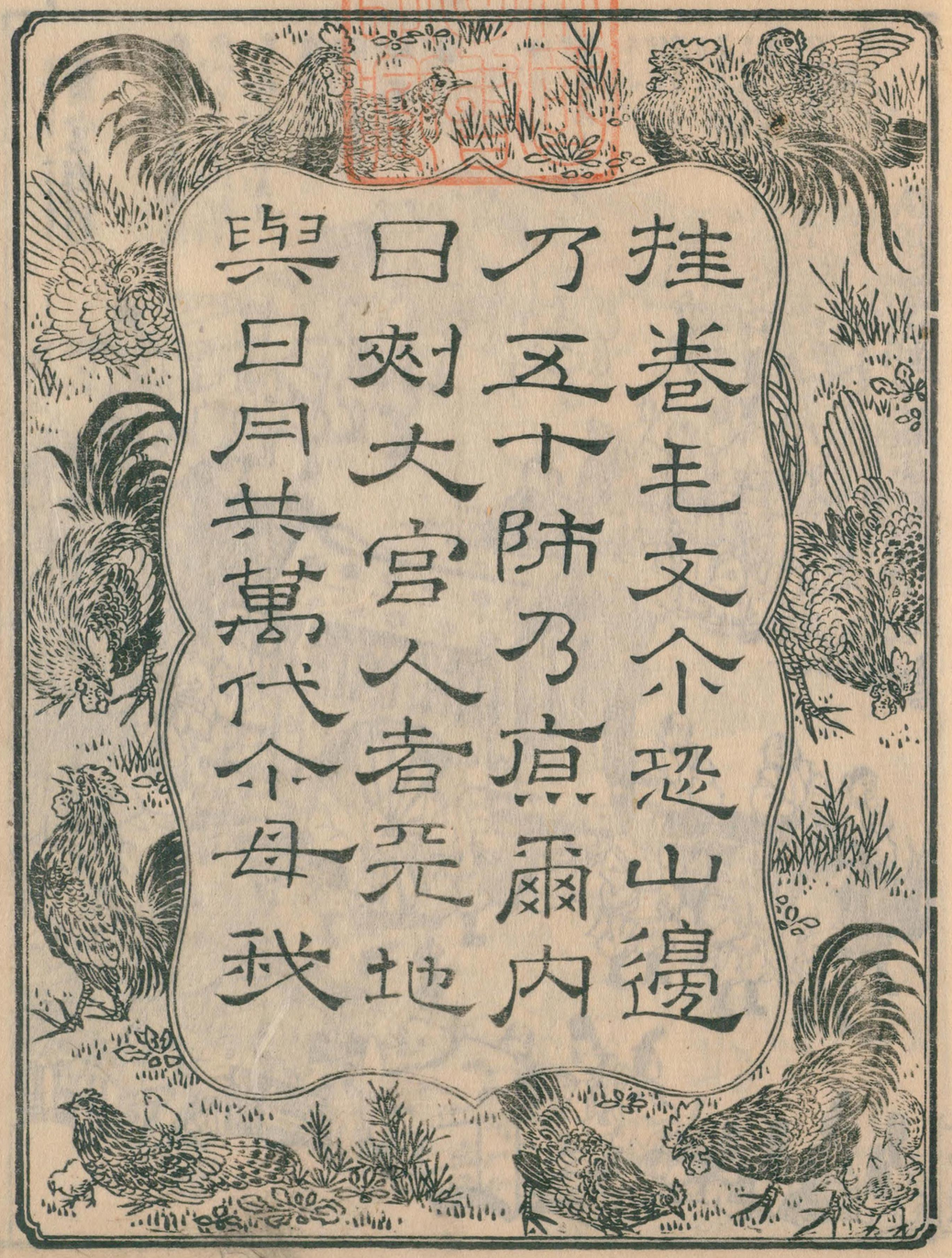
国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』　請求記号 特1-274
ガラス使用

特1
274

諸羽明神
袖川原
走井
近江國滋賀郡
関清水
逢坂のしでの山
関寺
大澤里
打出濱
同精神故事
義仲塚
脇所地門
脇所城 并矢橋舟
十禪寺
どうそうの茶屋
西國寺
鶯丸祠
関小川
関大明神鶯丸
長安寺
八丁れの辻
四宮明神
りつこ川
芭蕉堂
天滿宮
脇所の磯
巡地藏
小関城
逢坂山
関守神
立國親青
牛の塔
小町庵
同祭礼引山
石塲 并坂迎
同塚
八大龍王社
信賜の濱
四宮川
追分
逢坂関旧蹟
駒迎
関清水鶯丸宮
近松御坊
城跡
松幸村號鞠社
義仲寺
との川馬塲村別墅
八大龍神社
粟津原 并合戦

兼平寺
八幡社
鳥井川御霊社
桜谷螢 并瀧
源頼朝石塔
暦海尻掛石
田島社
五百羅漢
芭蕉幻住庵旧跡
石山寺 兼紀師法皇
同乳母亀谷石塔
悪源太義平家
精鈴の池
守る川
兼平塚
夢の浮橋
紫式部石塔
龍宮池
塊塚

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用



挂卷毛文介恐山邊
乃五十陟乃宸爾内
曰刺大宮人者兄地
與日月共萬代介母我

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用

齋宮群行

昔大神宮の御拔の代りとして内親王を齋宮と号せ
られ三年の間内裏及び
斎宮寮
祓禊して都より
伊勢へ
船さ給へを斎宮
群行とゝ
号し其國
より此書
の始
まる

尚幸宴ゝ
下の齋宮村
の第に安置ゝ
ぬ

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

△[illegible]科[illegible]までの都名所を讃[illegible]実[illegible]を着く其[illegible]ぶくところに△[illegible]て[illegible]を図も略を仮に[illegible]るい補[illegible]

京三條橋　左岡秀吉公　増田長盛の奉行せしめ作る石也東海道五十三驛これうたづむ橋の系後旅館多し　橋い石柱の鐵鱗とと長サ三十七丈餘擬寶珠の銘あり　増田い三奉行の一人なり四条五条の橋のもるを卒記より[illegible]

附言盛衰記巨関東下向の附に義仲白川の[illegible]義[illegible]重忠川系の[illegible]

本曾と[illegible]川を隔て[illegible]合[illegible]本曾を僅に二十三[illegible]

小勢堪[illegible]三条小川へ退く[illegible]中三[illegible]

[illegible]の勢と[illegible]本曾を[illegible]川[illegible]

達[illegible]の方其名あり　檀王法林寺△

畜生塚[illegible]

白川橋　七川[illegible]白川村を南へ斜に今の南禅寺まで流れ来り西へまがりて加茂川に入今の檀王其所の落合にして今檀王の裏に[illegible]

一間餘の堀のごとくなる系あり是元白川筋の跡なり今の白川橋かい[illegible]

[illegible]を町餘西の方に支流あり[illegible]南に流る川筋を是を小川と[illegible]

上系の小川とい別あり今の知恩院町を紆通して大和橋の下へ落る流也なり平ノ敎

盛卿小川の山荘とひしい知恩院町の東にありしなり。本曾殿三条小川に退くとふい此小川を今古川町と唱不其あとなりそろ形のごとくして溝の大なる流也あり　今浴中浴引とふ[illegible]古書に皆系白川と[illegible]

悪田院三条彰地のあるとぞ小白川之

古歌あり略之

栗田口　此道の[illegible]栗田口い栗田口のとふるなり

青蓮院　京極大閤師實公の御子行玄大僧正開基也當院筆道の免許あり是を入木道とふ筆法い尊圓親王を御祖として御代々書院相續ひく高逸の御書風を御家流と稱を

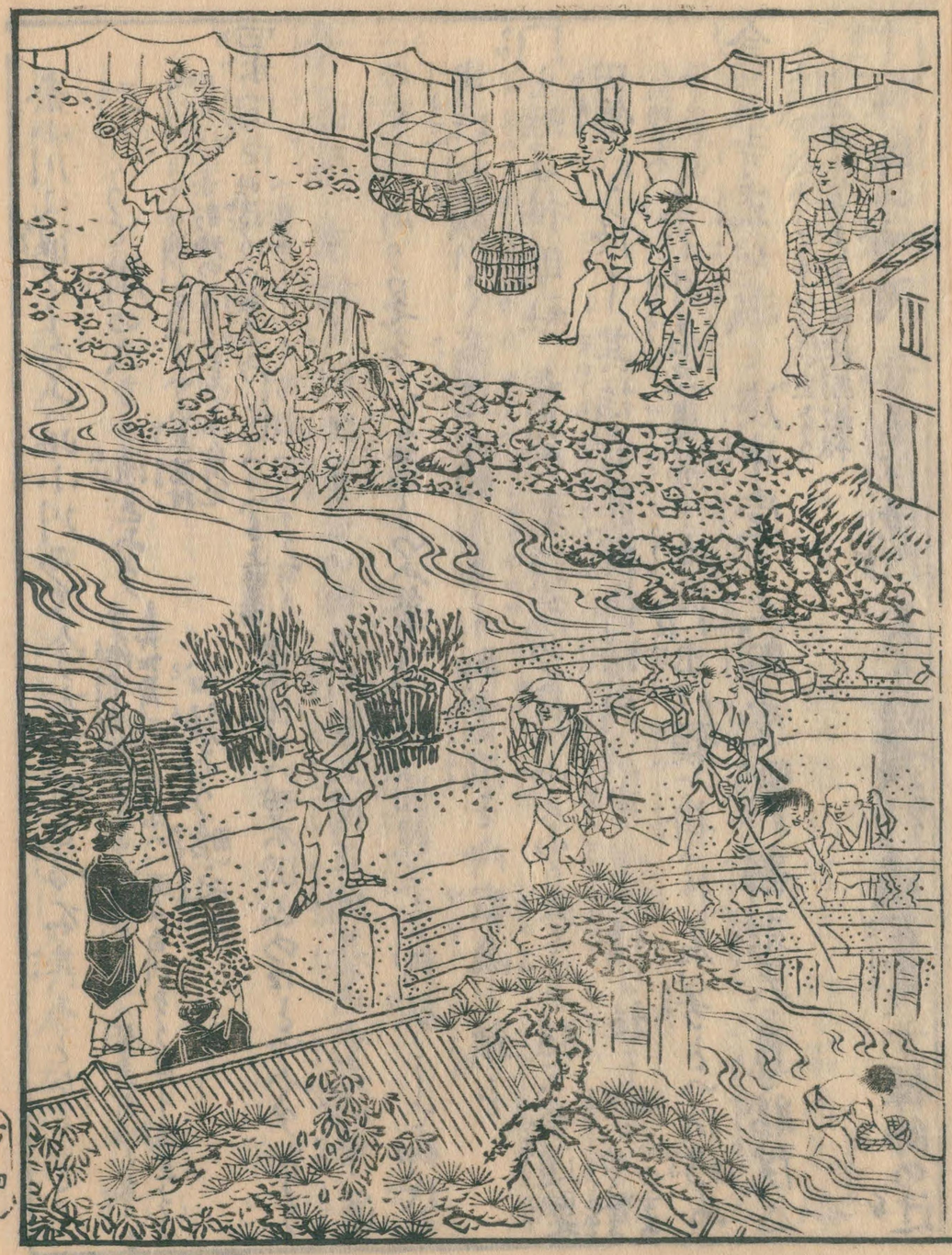
門出蛭子神明社　舊地い聖護院の森の小あり今上の後三条通栗田領にうたし其後青蓮院御境内庚申堂の傍に移る

[illegible]

金藏寺　本地藏。庚申堂。大師堂　雜財天。尊勝院△

十禪師の神祠　青蓮院境内にあり　百[illegible]

古書に十禪師の辻



国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

又御茶ところあり是い今の黒谷辺の廣道（広い道の意なり井大路）三条通の道を

十禪師の辻ところひしゝゝゝらん

附言 義経記に金商吉次牛若伴奥州へ具する所の人々の名に「明日吉日なれば明るの御くくの門出仕り」いさんどるとゝ多くいさゝゝ栗田口十禪寺の前をそ給んどるそとの多いられいとゝ云師の宮をまの宮にをしゝい義経記の書抜ゝゝゝ又著同集に一条院の御ところ元藤所十禪師の辻ところゝゝあり其ところより國上に出る所。此三条ともに十禪師の辻に出る御茶ゝゝいとゝゝ一基の社地にあるゝゝを後の青蓮院経営のことゝ推内にこもらせ給るなるべゝ

牛頭天王社　青蓮院の東にあり東陽坊忠弘勸請ゝて元弘ゝ来

回祿の後只利義尹の產土なりとて明應九年ト部兼倶ゝ命じ

再び勸請ゝて感神院新宮の額あり則栗田口の鎮社也 例祭九月十日 山城志云牛頭天王三社ゝ在ゝ一ハ栗田口盧御ゝ祭る也ハ吉田村ゝあり西天皇と稱を聖護院村と云ゝ名ゝ一ハ忠岡村ゝあり東天皇と稱を

悪源太義平ゝ忠臣十六騎の二人山内首藤刑部俊通ゝ墓 三条通廣辺ゝ在ゝ所ゝ人家の背ゝあり ○平治の合戦ゝ義朝ゝ敗ゝ義平ゝ逃ゝ給ん時ゝ俊通ゝ義朝ゝ敗ゝ三条ゝ辺ゝ敵三騎を討ゝて後ゝ自殺ゝ給ふ ○佛光寺廟所△

阿弥陀堂　服檀親鸞上人植髮の尊像を安置ゝ

定法寺四地　堀地御坊と号ゝ宣流御の記にも見へゝり地名今存ゝ

鰕治ゝ池　良恩ゝの傳ゝ曰 ○鮑治ゝ井　青蓮院御境内大谷氏の敷の内ゝあり

に物ゝ云ひく苔其ゝ鰕治の上ゝ多く住々ゝ有ゝ今ゝ敵ゝ名ゝ

久國為四郎ゝ名其名天下ゝ聞ゆ後鳥羽院鰕工を好ゝ治ひて院中ゝ

震治ゝ有ゝ云ゝ久國を師範ゝ召ゝ是鰕治の始めゝ鮑治の

系圖に新御所ゝ云ふ此院の御事ゝ御製の歌ゝ十七の箇を編

ゝ給ゝ然狂言の栗田口為馬之丞ゝ久國の子ゝ鰕治池井ゝ

に小鰕治宗近ゝ古歌ゝ云ふ誤なり

右大臣為宗宣雅ゝ山荘旧蹟 栗田村ゝあり和名抄 ○栗田口関白山荘旧蹟 俗名ゝ

續古今集に見へゝり

二條殿ゝ号ゝ拾遺集序の雅考ゝ ○田村丸の別業 日本後記に見へゝり

三代実録ゝ ○栗田口寺 山槐記ゝ云ゝ栗田口の旧蹟也

栗田宮舊蹟　栗田院ゝ云ゝ栗田村の小字地名ゝ圓覺寺ゝ云

ゝ昔ゝ清和離宮の旧地ゝ 三代實録云元慶三年五月四日 右上天皇法和院ゝ遷ゝ栗田院ゝ御ゝ遷ゝ其地ゝ坤ゝ方ゝ道場ゝ造ゝ額ゝ圓覺ゝ書ゝ給ゝ

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

栗田口十禪師
辻の故事

著聞集云
一條院の時分秘蔵の鷹のありけるゆへ
ちりのひろいなどもなべて
あい給ひけれども
鷹を栗田口十
禪師の辻堅
とのぐそ自ら
人の云ふを
ゆるすして人と
分られけりとぞ
いひそれとかや
五編仕事ぞ
るとて人馬が
きりて此鷹を見て
云ふ所逸拙ん仙ぞ
あるいそ見とぞいひてゐる

有あり初此人をゆして
ゐるゐいせ名に南蛮の海
に魚集り浮
ひとりゐるに鷹
を取りゐれば
あいせてたゆ
鯉を見てゐ
ゐるまぶゐる
見てゐるゐる
帝其方
と問せた
まい義曰
此鷹のこと
ささご狩の
鷹と先母のゐる
ものひとして給ひ
義と行るものこひと
せば感感ありて仕法
國と田園を場まる
拾捨者平こんたり

古今集歌名・うきぬをいとよそのうきぬをいとよそのうきぬを紀ノ雲のあいだ

此あいだ水尾帝深草のうあたりの地へうつり給へるを

たゞ一ぢうのうちにうつりとゝまるいとゝ雲のうへにて栗田をあいまいらせらるゝを

圓覺寺之佛殿の額に栗田をこそ

雨風もくふのたゝとそのこゝろをむ法れむ　後の花をちらしく

拾芥抄に京さゝ白川と云へり　和泉白川の説に叶へり

比丘尼坂　本名あびくびくこと坂とも　昔此辺よりひくして居て往来の物乞ゝ　所名議雅有

こうのゞ町とも云ふ　左はあうとう小側い南禪寺

して南側い谷川町なり。此こうのゞとも云ふ一切經谷金剛寺阿弥陀堂應仁の兵火に焼しとれ

尊を流の上に安置せ　石なり

號上水　関原与市　**六軒町**　**九体町**　此間二町之与市之後九人討死　菩提のため石佛九体たて〳〵　其内三体い今あり右の山い栗田

山栗田院尤の北南禪寺院の山栗田院の右い花頂の墨の南禪寺院の山

ゝ折城く十八丁奥之大日山と云あり　御乞云ふ所名を所名上さい　標木あり　栗田

山と日の墨の間を乳母ゝ嶽と云ふ

日山神明宮

松坂　栗田口より日の圖へのぼる坂をつ　©平家物語　加茂川をとゝちまつり栗田口松坂へもゝ

長明家集　ひとりこん復氏髮らむまとる風よ我まゝ坂の松なりは松

附言　着よう踊の青羽りみ代の松坂と云と謂ひ〳〵も此氏きて〳〵り其證も某家

不藏室町殿御參宮私記之　應永三年十二月十四日

我もまゝとゝくふい都よ入日うけうもつくむふあふ坂のゝ

松坂よもたゝ氏年〳〵の御參宮ゝ此不〳〵もゝ嶽の松れ氏あゝ〳〵

度毎の祝通よあひねるも祝義の志〳〵しむる不なり

若き狂ゝ代の花さく松坂をい〳〵十廻ゝ歌て又氏へき

栗田山　たのくゝゝ城ゝも城と物〳〵も氏道坂いゝるけうをゝ

日圖嶺　此岸の左りのらゝ徒ゝ山ゝ有ゝゝうげの茶屋のむふのゝ山い東ゝ三ゝ其うゝ見ゝ人　御日の墨

生ゝ石氏細米ゝて樂燒の　御道ゝ南東氏さゝして紀ゝ氏ゝ氏不の名ゝ

附言　明智光秀の居石ゝふ　**本食上人の庵**　**義經ゝ本松の右樣ゝ**△

ゝ山絵ゝ大津ゝ物ひ〳〵攝ゝ〳〵　俊ゝ山傍のやぶれゝの道ゝ交る秀吉坂尾吉晴ゝ命ゝ下て兵を進

主仇有前白刃空　殺身曝尸報君公

可憐晋國刺衣客　共感生涯一夢中

ゝ〳〵紀ゝ家の命ゝみ〳〵ゝ家のあをとも結をひの居のゝ

山科　山科ゝ不都て八十七村あり　枕名所い。山科川。山科野。

青羽山　遂坂ゝ山清水寺にあゝ〳〵　○鏡山　兵を家を石　○花山　御乞ゝ　小栗栖

○**槙雄山**。四宮川。石田野　御乞ゝ　小幡　共ゝ名不ゝて山科の内ゝ

山科の青羽の澄ゝ書ゝ人のゝ氏へく我ゝ氏ゝやも　不忠淺人

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

新拾遺 乙科の言羽の川乃さよみゝる及ゝ波ゝ乃ゝ〳〵ゝ峰

[illegible]人乃ゝ波ゝ乃ゝ〳〵ゝ波ゝみよゝ〳〵ゝ波ゝ〳〵ゝ乃ゝ乙科の里

新後拾遺 ゝ乃ゝ人乃ゝ乃ゝを波ゝ乃ゝ乙科のゝ〳〵ゝ〳〵ゝ里の秋乃ゝ

雪ゝゝて靡ゝ乃ゝ乙科のいゝゝ〳〵ゝ秋のゆゝ暮　秋阿

天智天皇御廟　造りを御廟野ゝゝ乃ゝ街道ゝ三町斗り左へ入ゝ森に小

祠ゝる居皆落〳〵石の水鏡ゝ三月三日帝御馬よりてゝ乙科へ入して林の中へ入ゝ

[illegible]ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

親王の御筆其外中「きのくにの名所の溪にあり名所と面白きなどいとあきこけをさぐるこゝまさ名のうこゝに此うこをつけてなりける

あるひもいたてそうるろんて此心をうんせんとしたのたれい　業平

後撰　たうるくて学にうるよりいと科の宮の芝木とあ〜はし地と　三条右大臣

毘沙門堂御門跡△　奴茶屋△

諸羽明神△四宮明神とも云。そも其の額い宗生の筆にて宮の氏神なり〜〜

十禅寺　此宮村にあり本名の聖観音堂なり徳川家の御祈願所なり今の堂も其の時の建立なり△

巡地蔵堂△山角堂路傍にあり俗に山地義とも

○愛宴記曰六　西光法師の建立なり〜〜此宮川。小橋里。西七条。蓮華堂跡。浄蓮華。西坂本。六波の地義菩薩を造り率塔婆の上に安置場を構へ大悲の誓願を

○安祥寺村の　此西光法師の建立なり〜〜此宮川。小橋里。西七条。蓮華堂跡。浄蓮華

四宮川　東面にあり　此宮川系とも云　一名神の川原　深い三丈の石より出て小関村

宮川系とも川とも　此一名細き流れ　長き川系なり〜〜此宮を経て此

小西家集　此の宮川系の流れ

今年よりいとゝの宮の秋風やうあの板もいとしとうは

るに此の宮とかしてよりの小社小町も仁明天和の法名〜〜といつゝも全く多日

も此宮の宮の名いこの此宮は〜〜此宮は〜〜花もの樹のうちに

又神の川系とも云名書

夫木　都をはけさぞ立つる旅ころも神の川系の雪なまりひゝみ　永久内大臣

附言　拾遺　今もむかしの此塚のあたりに宮川系とも云ふ神の川系の宮川系とも云ふ地義菩薩を一体造りたりける紙

のあるまる系ありその辺りよりものみるる地義菩薩を一体造りたりける紙

用眼もやはらかつよりうらへて此の邪名なるとも物ぐるきにたりて芝のつくるきき

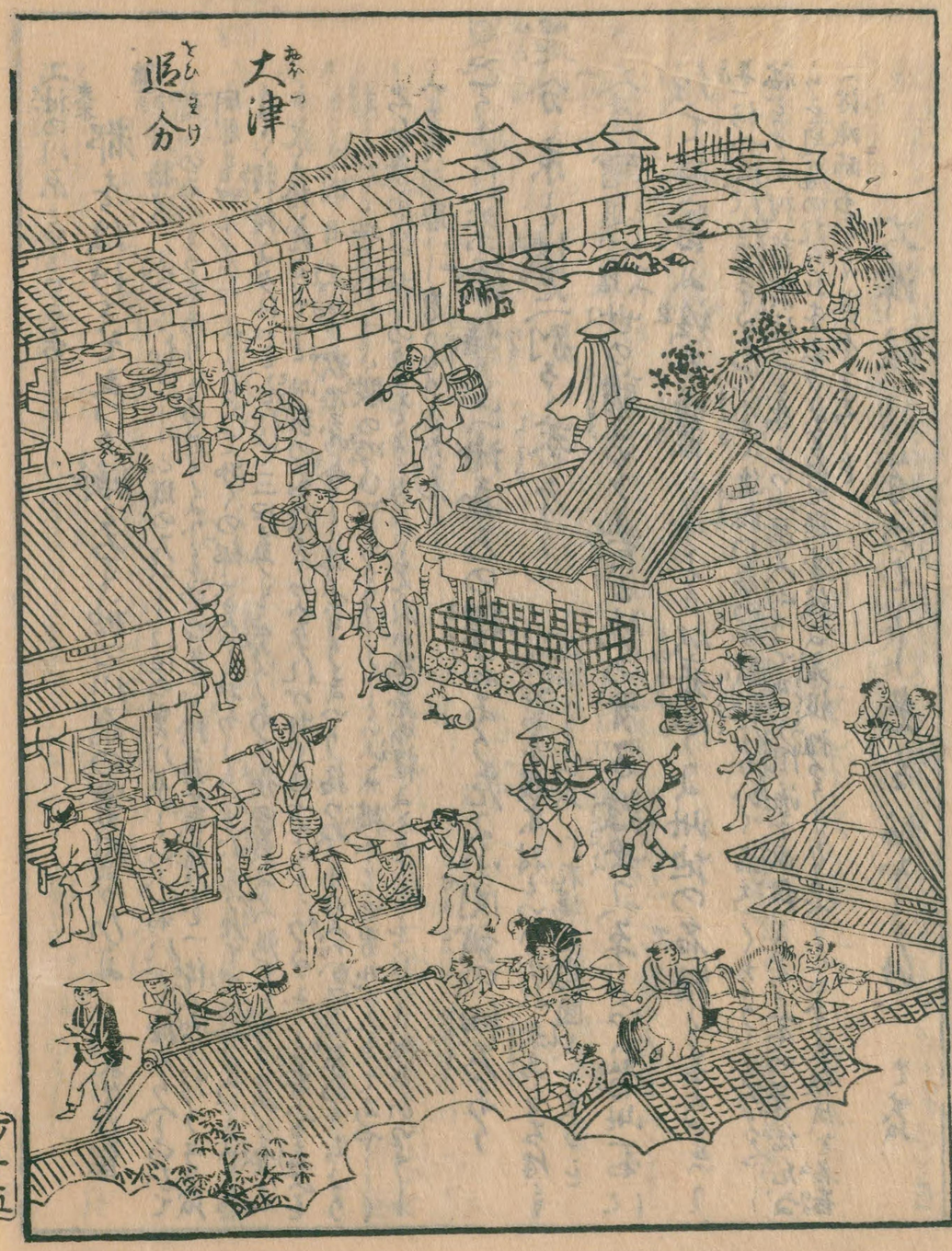
此の宮の名義なれば此の宮の名義なれば三日ある夜の義なれば後をうらりの義なれ

ゝ地義なれば此の宮の名義なれば三日ある夜の義なれば後をうらりの義なれ

なりり明日天帝釈地義菩薩〜〜絵ゝなりるまつり絵ゝなりるまつり絵ゝなりるまつり

絵ゝなりるまつり絵ゝなりるまつり絵ゝなりるまつり絵ゝなりるまつり絵ゝなりるまつり

ゝ地義なれば此の宮の名義なれば此の宮の名義なれば此の宮の名義なれば此の宮の名義



国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

走井

此餅や
の庵の前
某乃
抱好
して庵を
造作と
云書も
出て景
中倉と
云符号と称
せり 俗し今
年五世二年
前山崖濱
出く其名
なるり

山うけの亭

築山

走井

高木なども
其余風もうへ
うり築山の上
に小亭あり是を
ふうけの亭とゝ
内に小野小町百歳
の像とて第短冊を
持うる発願の像あり
石の高さ五寸
小堂あり無
茅原とゝ
石佛なり

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

走り井　今一里塚の餅屋にあり　茶系集みそしるを井の狭あるとも此あたりきうべ
そうしるを井の須磨ちゝはや逢坂の関いきあるものゝ絵をとゝもこゝにおいて名をえるゝ　元浦

あふ坂の関といへとも逢坂の水をはえこそ留めさるをけれ　坂川　方波大臣

精撰日記六月唐崎の条にちく車よせ〳〵あるものゝてくるひきあるゝてこゝろゆるれ
であるとひさ〳〵れいこゝろ拙ろいたるゝ面のゝ人ゝをゝ者ゝ拙ろいてゝろ〳〵ゝ裏ゝゝ
ゝゝこゝゝゝ拙ゝゝゝ

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

逢坂山

一名を向山

手向といひく往昔
旅行人ここらを山の
麓を通行いろ〳〵
の紙とぬさとをて
匹方へちらしを祖
神へを向しゝ
其手向の山此
山をのぼるこ
いわゝね共
都より出て
まゐをしり
新四郎のもれが
必此所をゝ
を向せ一名
を向山の名も

あり新四郎を今タフ
ゲをふを則たむけの
博語あり 髮冲
説

後撰集 巻四

名にしおはゞ
あふ坂
の
関
人
来
ま
で
ふ
ま
ま
も
る

あふさかの関
あきとぶも

地名ばかりもよく古歌も多し。関屋の跡いまは山となりたれども土塗の市中にみえ〜〜もつひく来詳。著の関いるるら況国境なる歟くそと関戸関澤とかう

あふ坂の関〜まちくさ拙なくはあらじまうるく君ぞとめよ　雑波

源氏関屋巻よ　関もりのさもるやまくやまくまでいと文の玄みて世関もるこうひ〜もを禅の主古法名をえの異判みたしくくひうきれを

この附も関屋もるるもるもちなしぶを蟬の常陸より源氏石山詣のもちにて

ぶるるこれ名ぶを風情なかろ

関清水　岩清水　今八幡の禅丸の社内あれども長明変名拙みその附

既よ水ふるこるよ〜〜ふんくれば今さざうにそ〜〜もあるるどうんぐも八幡

明神家の所を関寺清水所とつくべ世遠りとは月くうう

古今雑体　君が代よあふ坂山に岩清水こころ遠さうとあひけれる那　忠岑

此歌ふてふるこれば義ふるる木陰よある岩間ゆとよう涌出るるべ〜〜

拾遺歌　延喜の御時月次の御屏風よ。和の集よい八月弱遠と出澤う

逢坂山関の清水よ新月てく今やひくらん屋月の弱　貫之

関の小川　又関川とも

金葉　青海山紅葉ふるし相坂の関の小川ふ〜き拙りかく　後拾

新千載　誠て後拙ぬしるるあふ坂い関ちる神やゆるさるらん

関守神

今山上よ禅丸宮二座東西よあり　中来後の幸〜〜ふ〜〜紙関守

神ふ禅丸と名付〜いを素の石ふるべ〜〜右上下しみ〜〜ふれ

秀吉連歌の端書よ又人うり昔関石ぐ〜〜神祠を置よ市よ市

姫の神撞よ橋姫の神を祭るがぐ〜〜東猛剣八よ誠の白川関

の明神よ奉幣とみも関守神〜て今も関戸明神〜て石ぐ神ふるもみえ

○小田原戦中よ秀吉東武小条氏攻を夷る射大津上の関の明神みて天下行禅の

連歌百韻ありて年紀を天二十八年六月十八日北条人滅世禅正少弼長政

連歌会る

改めくるる紙むもひよう紀清みう那　紀已

まげ紙ふ海〜〜ふ〜〜く板むう　清正

霊紙はあ〜〜紙風い吹〜〜く　唱叱

霊〜ひをあけうみ

降紙丁枕のうへよ夢をもう

うけを禅よ〜〜き紙月

駒迎

約牽　むう〜〜毎年八月十五日に諸国の御牧のるを天子へ夏

奉るうてあふ坂の関を来る紙左馬寮右馬寮の官人此よ〜〜

関大明神
蟬丸の宮

牽なるこしを逢坂の関迎えとる牧しとは天子諸國へ仰せて馬を御牧とし其國を甲斐武蔵信濃上野
十七日を甲斐猿坂廿日武蔵小野廿三日信濃望月廿八日上野之尚國上之紀を

逢坂のゆふつけ鳥

あふさかの関のゆふつけ鳥よたれかはるとなくこゑをきく　雨隆

ゆふつげ鳥とは夕の中さけき時に焼の名ゑて物に鳴くゆふつけ鳥
の関ういうそ逢坂を玉一方の関なるべかくよろう又
大和逢坂
なげみそだゆふつけ鳥よ物うきこゑを聞てゐる

龍田も大和界の関なりさを逢坂なるゆえ有名
南は紫田一西は宗生なり

関大明神蟬丸宮　せき丸のすいりし給ふ此宮の御神ハ八丁の間ハ関清水明神と
きう九月廿日又此社へ遷御あり是神ハ九月廿日より清水明神へ神輿とうり
三角観音　尚又蓮如上人の名号石あり庵ハ義光院反の部あり蟬丸の琵琶を安置
関清水蟬丸宮　此宮の前の関寺明神ハ今ハ三井寺別所の内近松寺中とゆう
拝殿の額ハ表して云　関清水蟬丸宮醍醐天皇第四皇子日本國中説經讃語
勧化師者曲藝者等の祖神也　右等之者之免狀當本社出之也　○関清水涌出
源在本社拝殿之前　○小野小町姿見石在本社左
○小町庵　室在本社少北西云云

祭礼の日ハ蟬丸蜀紅錦の御衣ハ〆しく不拘の長刀金装横刀を佩ゐ

逢坂駒迎

拾遺 あふさかの関の清水に
うつるかげ
ひくらん
逢坂の せきもるど
ふるなるこゑ
ちるもみぢ
えらみ出る駒

大山田之助

公事根源云 信濃の勅旨牧の馬奉る六十疋 勅旨の牧 諸国牧也 式云 六十疋 内 八十疋 駒 代りの子ども 栗毛

御園の御園忌より
あくるはつかの十
六日にあたる天宮
南殿より出御なりて五馬
を御覧じ上々御馬の解
文 国々より貢る馬どもを奏をとり
果て公々以下次第よりこれ
をたまはる馬のくら
つるをみりて御前
みをてうこ一拝す
取のこしの御馬を引
野役とて
次第をりて院
東宮をはじめ
奉るべきかくへ
まいる〻〻

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

○蟬丸い延喜帝第四の皇子なりとい源の親王東奥記紀にもさいのうり延喜とも其説区まちまちにして書にも是を論じて異説多し今昔物語に宇田法皇の御
子敦実親王の雑式にもいとりちふよえより姓氏もたえぬ人なれば此説い信じ
べし今昔物語に博雅三位とひろ人なる未明とうやの目つぶしなる法師に琵
琶ならひしに此盲人ハ混じて蟬丸も盲人なりしい絶人なりしといひつたえ
蟬丸盲人ハ和歌にすぐれ多くの後撰集にこれやこの行も帰るも知られぬ
ゆくもの人をしるらんとあるはこれ蟬丸を延喜帝の御子なりとい分て
水戸学士の説あり是又信じ難し耶尤記を
○唐南朝の帝の諱を延基といふ延基の三男禅師のかたり癖にて其上瞽にしれば逆に是
を相関といふ人不して業落ハ此の名紙蟬丸ものいふとるまぼ幼年より琴を弦弾ぜり名ハ
幼名付しと今世にいひて日本の蟬丸のみと考るる延喜を延基とキの字の音ハ一弾字

関寺小町

関寺小町の孤き教楽秘中の秘をひらして其人うあらざれば会さじ

うかく道交雲上玩茶會宴

にもかつて幸也

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用

と禪ノ字と形ハ似ようゆゑ相関と相関とハ延喜の子とをそれ世紀ハ世紀ハ
むかしの人唐のえ帝の故事の云ふ拙ハ日本の仙集の中より駿九の科のあうり紙男のふ
のもと古史考巻三十ようゆゑ紙竹を妙んで大宮人ようゆゑ接来仙集の中より流水の曲をつくり後の孫
ていはゆの関のかうり丸彦紙ちつくひ紙来の人のようけあうり彦命をつるぎ
見やこのい其所のようくつくるいさもみぞ
○按るようつくへの後名書い唐の故事ようる小説るどを掃て紙くるる事ハ流ハ所歌掃流
い後漢西南夷傳ハ三節の天竹を流ハ沼て其中ハ一男児あり屋てこれ紙書くつくへ
故事をようて紙ようて又人これが禪九のもうるべきるらん

関寺 古の実ちい三井寺五別不近松寺の内ハ近松寺ハ
大きうく坊舎も数多あるうの古書ようる
長安寺 元関寺の跡ハ云紙寺松紙流みてあ山法園寺の寺ハ
ちう紙紙寺ハ関寺の古図あり寺内ハ古
当ハ紙寺ようる紙ようるべし○小所百鬼の本像あり
小野小所年老く関寺の遠ハ紙ようとハ其所の故
一のそれなり我所のさそやあさみどりつめい所ハの孫ようる
又苦菴の掃り書ようるとく
紙るまで所をはかそとちひそれ山ちつるの人の所遠り
或云小所関寺ハ紙しるつ紙の書ふもるるる色関寺小所ハ講曲い小所ハるるそうて
人ハの墓裏をさとしめんがうあ紙りうる紙菊の寓言ちるべし
○**牛塔** 関寺長安寺の前ハ紙ちの前ハ紙図紙ちる
又寺の石塔ようれ山も今ハ一重残ようる 渋海志ニ 此塔を霜牛塔あるひハ迦

業塔たつり 慶長の頃ノ慶して今ハ塔中ようる
城出しるる佛舎利ハ近松寺ハ出図上ようるべし
○**関寺**ようハ或云長安寺の名ハ元を牛の塔ようつそ栄元拙治ハ更科日記をハ考ようる古
の関ちとちひしハ大伽藍ハ近松ちの遠ようより遠坂の西の禁ハ地ちるべしこれをいうんと
ようれ今西の禪九の宮のうしるる慶ハ谷ようるこれを孫勅ハ山ようの人ハの衛
の所地とちるようくるるべ其所慶地を山ひくくハ小所蝶九ハ所くくくハ
所ハ山ようくくハ小所蝶九ハ所くくくハ
○もるるるん尚三井寺別不近松寺ハ関寺の地名紙ようてはのづくし
紙ようる今其所遠のみ所紙ようる関の遠ハ所の社地ハ後ようる関寺の後の
近松御坊 西本願寺御所ハ 或云紙寺御所ハ
日華門を大谷御坊へ賜ようしをとの門の最後ハ紙紙ハ宗門のかた
ちうしそ大谷紙焼拂ハ其所ハ上人新像紙舊ハ包ハてのづ上ハ三
安寺紙牧とし 新像と芸ハ近松ハ入ようる此所来ハ石を三井寺ハ
分附せらる上人支ようる諸国経歴してハ三井寺ハ向ようる其所
地ようる一説ハ伯ハの御坊為徳院ハ所近松寺の住ようる居ようるる齢既ハ六十餘業明ハ
文明十一年正月朔日 雷
たつたまに其ハ去ハたつるるるはし 光ハる

蓮如

関寺

牛佛

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

霊法人年ゟ此ハ方のむ免ゞ香　竺一撿校

其後山科真影堂成就してうたゝ奉らんとせゝれ三年の内
衆徒是を拒んで真影を帰さゞるゝ上人筆ゑの御
影を写して新像ゑゝ入給ふゝ山科ゟ移ゟ此後山科焼ゝ
てうゝ影像ゝ不ゝ焼ゝ今京西本願寺の尊影ゝ是ゝ
水車のうゝ六条ゝ毎年七月廿四日千仏佛とゝ称ゝ
松寿ゟ毎年七月廿四日千仏佛とゝ称ゝ

大津里　淡海志ゟ町数九十八町人家四千餘軒四道の往候ゝて
人馬牛車をゝて洛中へ運送ゝ
いもよりゟ名逢坂ゝ関城ゝ往ちゝ車のゝ
やりつけゝゝと　舉白集にも書ゝ

関ゝえゝ　養ゝ逢坂の大津馬のゝ一つゝ乃意くゝ　為家

秋の日もゝ入ゝ此の紅葉は大津の里ゝ　俊成

大津の名ハ天智天皇の都ゝ　此地へ引けゝゝ町数も数ゝ　此ゝ町の名ゝ牧本と申名あり

札の辻　京町　札の辻ゝ　南へ行町

城址　今官廳の不ゝ石壘水中ゝ沈ゝ天園の遺代
京極宰相殿ゝ　此ゝ城ゝ湖ゝ始めて入ゝ

ゝ入ゝとぞ　田ゝの浦ゝ歩出ゝ見れば白妙のゝ下のゝ
本曾ハ都ゝ　今ゝ

ゝ方角集ゝ昔の城ゝハ相坂の関ゝ上ゝ七町ゝ
右のゝ通ゝ松本の渡辺ゝ出ゝ見ゝ歩出ゝ

あゝ坂をゝ出ゝ見れば近江の海ゝ

拾遺巻五　ゝゝ人ゝ浪ゝ見る　後人ゝ

ゝ出ゝ渡のゝ出ゝ見ゝ人の心を　後人ゝ

四宮明神　其一地の遊ゝを　祭神未詳　名の居の額ゝ天孫茅巳宮とあり

名国誌云ゝ法判刻ゝ　大津巳宮ゝ　神社領ゝ　神社領ゝ
賢本殿ゝ　ゝ発ゝハ今ハ絶ゝて巳宮の神官總政不の儀ゝ
ゝ大本ゝ巳宮の社中ゝ　ゝ日吉の賢本殿ゝ
とハ別ゝ中来の有ゝ　○山王祭ハ巳ゝ三日ゝ

松本村松本社　蹴鞠の神　石系猿田彦ゝ神　大石ゝ城園桂宮ゝ在て　後醍

羽院上皇鞠位をこの神ゝ祈ゝ　ひ兼元のゝ　免勅ゝて此松本

園ゝ遷座ゝ　ゝ無史の後今の地ゝ遷ゝ　ゝ鶏　淡海の名家より

職鞠精神

著間集

侍從大納言成道の卿は
職鞠の道に心ざし深く
古今のおもむきをぞ学び
給ひける或夜棚に置
不の鞠者にまろび落
来りぬと思ふ程に新
人にて手足身は猿丸
なる三ヒキの小児なり
なる者三人もづつ
鞠のなりもてあそぶ
有様を
問給ひ給へば
我は鞠の精
首よりかけて
鞠を好せ
給へ人なりと
云へるまゝ

やべきなりて
給へり
眉よかくやうる
髪とやうよる
ほこび一人が額
春陽花
の字なり
又一人を
夏安林又一人を
秋園の字なり
合て君御鞠好ませ
給へ代は国栄一宦増
給へ後あらん御鞠
の時はかくの如く
本づゝひよ給へて宮づゝ
仕り御祭りとぬ給へ
ゝゝかどゝ其家は人を
ゝりぬされば鞠を
ことば紙の
額の

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

牧奏の社なり神多八月七日○旧記曰大津松本村平野大明神元亨二年三月二十日○一宇を建て義仲寺と号す

皇子をまうしく東大津松本馬場の妻神なり世祭礼に月朔日本宮に上る七所勇の

ゑ孤なるゑ云あるべしを

常の社 傍の小祠なり世人

今この宮石山寺の宮石山寺の宮石山寺の

義仲の撰選にあたり能登義仲を宮居迎へ
戦ひ敗れ給へるを利なくして栗津の浜に出て流矢に
よりて落馬し給へるを大畏れ給ふと

○芭蕉塚　并に　祠堂　本像　當時其角去来を始め元巳方の
門人是を営む其後天明年中翁八十回の忌を記念碑を書て堂内小
又改建る祠堂の内に人形三十六人を画き名殺名を書て堂内小
掛る翁の嗣子一家の親族俗姓松尾氏名は宗房忠左衛門と称せり
翁の嗣子の孫に嗣子の風月の若き者吟ずる俳諧の宗匠忠左衛門と称せり
風月嗣子死去せし翁其死を哀しみ其の遺髪を畜ひ
子孫ゆづりて是を君の遺髪を畜ひ
ゆづりて是を君の遺髪を畜ひ
後世泊船堂と号し芭蕉一株を植ゑ是より風羅坊と号し延宝の末東武深川に居を

芭蕉翁かしてゆ雨をきく夜かな

死の雲猪を上野の山さくさう
眼前の美景をのべ〳〵に深川よりて
を消し〳〵多く深川よりそれ業の
隠れ住む多を行脚
風の吟幻化して風の師と仰ぐ其後いづれ
庵に於かくて〳〵ひ深川

其年より大津服部の人のつくり給ひし石山の仏庵に住し光孝心を
て拾ひ給ふ年あり元来混雑寺佛頂和尚に嗣法して禅の法師と
いまれ須広の夜泊象潟の名所とて扨ちらの庵に住つゝみし

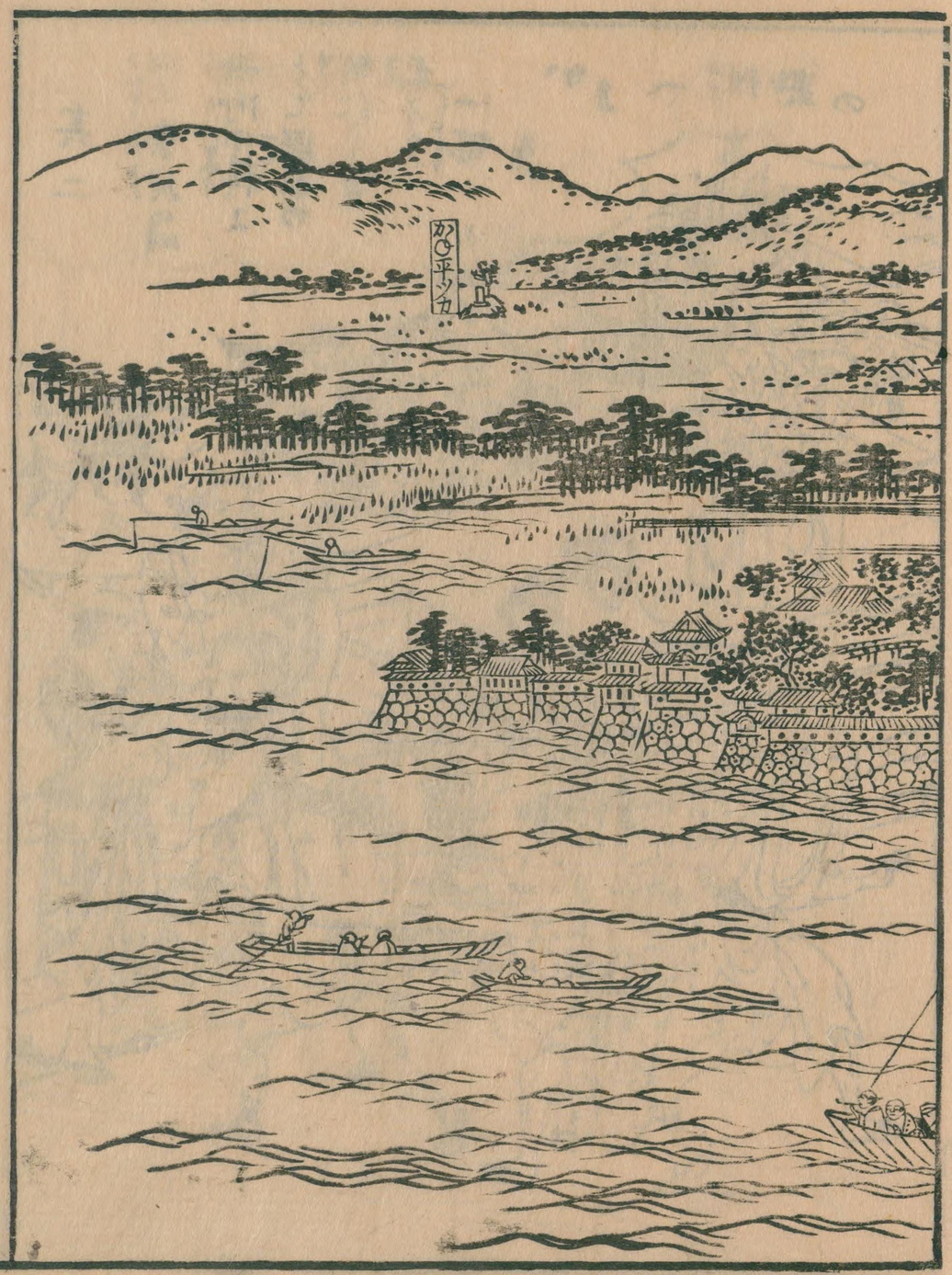
住たくな旅のうゝ後や扨ちこうり

るとゝいひく紀氏の歌も十餘年の間枝と
其後伊賀の故郷に庵をかまへ三ケ月の記あり
ふたゝび門人あり集をへぞく命運を行脚
旅に病んで夢は枯野かけまはる

いよ〳〵命きやまひとなるまでは其角去来を始め其席に
繁〳〵絶へ良元沖堂の系元巳の裏に人る偶居の寂を公翁の遺命
本曽屋と並べ称せんとそかくを慨して其角を門
来大坂服部の遺衆まゝ集る者三百余人とかん塚に
本曽殿と資中合せの墓をさう那

右晋子の枯尾花にねをそこなうて揉とうて其大むかと記し行る又翁の
俳諧に六十余州に蕉播門人をぶ〳〵二人〳〵入り
をうけて好人の誹諧に今諸国に営む芭蕉塚の数二百余基に及ぶ

この川○馬場村○別保　国分寺古蹟　菜師如来　○服部所撰門
天満宮　此傍に北条　和泉来東武醍醐宮　吉田桃源院法印常
撰待を構ふ
八大龍王社　服部の城下にある木にあり古俗
八の宮に八月九月朔日　○八大龍神社



国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

其二

山王祭礼の時
供御の料よ
りて賜不の
所にて七日
和ようの
一場
を
往来へ
の

人々、
ぜんを
ぬふ

吐にてれを
賜不の猿と
云

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

膳所むらしより日吉山王祭の神供を芸を加ふ膳所と云ふ大関若狭記
右手記ふ建世ともあり右へ此地い栗栖産なり○膳所の城元い東坂本
て信長公明智日向ちを滅を崇らむ大関の市代大津ふ橋
次元を守る其後戸田某此地ろうい繁くくるの
おもの濱膳所の古名なり歌家名所俗膳の
渓と書也

拾遺作集ふ
とくしろふるかもあしふ近江なるおりの濱のなまれ甘つぎい　兼盛

おれい安元年中大掌會風俗近江のふ御膳のるを云ふ
膳所大明神　所祭大梵天　城の大ふんあり元ま城中ふ色を寄ふ三月三日菊よりこれを栗津ふ云ふ
栗津原　栗津建　栗津今膳所の城下其旧地にて膳所明神ハ即其社の神なり
のりくもつふ

後拾遺
あり明はとろろ月とろろのぐめは冬ふ冬つむ弱ぞいたゆ　權僧都静圓

そどろのとときの説ふあり一説ふ此地一強の名
兼平寺　崇徳御菩提所縁心寺の境内ふあり石塔道光大居士
兼平と記せり兼平塚も時ふ建
栗津山王祠　元を田畠の宮ふ川原の濱ふあり幸縁未詳一説ふ田畠某ふかげ
ろの姫ふ云ふ者ありて頼朝の感状ふ云ふ此地ふあり元供膳のふ
元ふりんじめしとふ云ふ今社祠を山王神ふの市供炊屋ふ云ふ
ふり尚安しくいふを
祭りの祭下ふあり　○かげらう社　社の名　○鬼塚　街道の左田の中ふ其石祠ふ云ふ

八幡社　一座　末社　膳所小結ふあり　義仲　希巳女を祭ふ云ふ○五百四縫漢
寺号関係古縁記墨書
○守ふ川　上のりろ川ふ云ふ元い田名にして苔栗濱の
森をお城ふ建ふ云ふ川の流ふ
兼平塚　膳所の松ふ云ふ二町西田の径ふ云ふの塚あり膳所城ふ足を建ふ
尚図上ふ記を

兼平が塚　湖くとりう田ふ那　鬼貫

鳥居川村　茶屋あり元へ紀ハ修勢ふ云ふ東海道勢田の橋へ出る東ふ紀ハ石ふ云ふ元ふ少ふ其
次ふを仕ふ石ふまたそふ云ふ渡ふ

▲御霊社　三井寺の縁記ふ勢田合戦の幸ふ云ふ
▲芭蕉翁幻住庵旧跡　石ふの奥石間の後国名ふあり翁の記あり
風俗文選猿蓑集ふ云ふ

▲あふふの薬師　慶天三年三月建立此地の石佛あり撫童仏石佛
夷曲集石ふ云ふ元ふ云ふ元ふ云ふ元

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

へ出ずれと云中ゝ美のうに拾とて きうあるあるゝ実敷鄙の ぞうゝ
其外後の美乃うれそゝとでゝて美しまうゝ 撰雲の 宝
とよゝ絶るゝ比美のゆゝ。按るゆゝ しゝいうきえゝしゝのゝいひゝ紙 添 語の 縁
ある地るれば好るゆの人美ゝゝ 因紙 添てようひゝゝ ゝるゝやあゝん其 流い
玉葉集ゝ赤融流石ゝゝ 和ゝ ます 対九月北日 在上人ゝもうき 拾ゝ ゝ不へまゝうて 功
我ゝうしも ゆゝる石ゆゝい 拾ゝきにいゝゝゆゝ ゆゝる 杖 ゆゝ ゝのゝゝん

公曰

▲石光山石ゝ寺 勢田の 如意輪観音 ゆゝ 礼十三番札 不 用 基い良 雑 僧

東ゝゆ

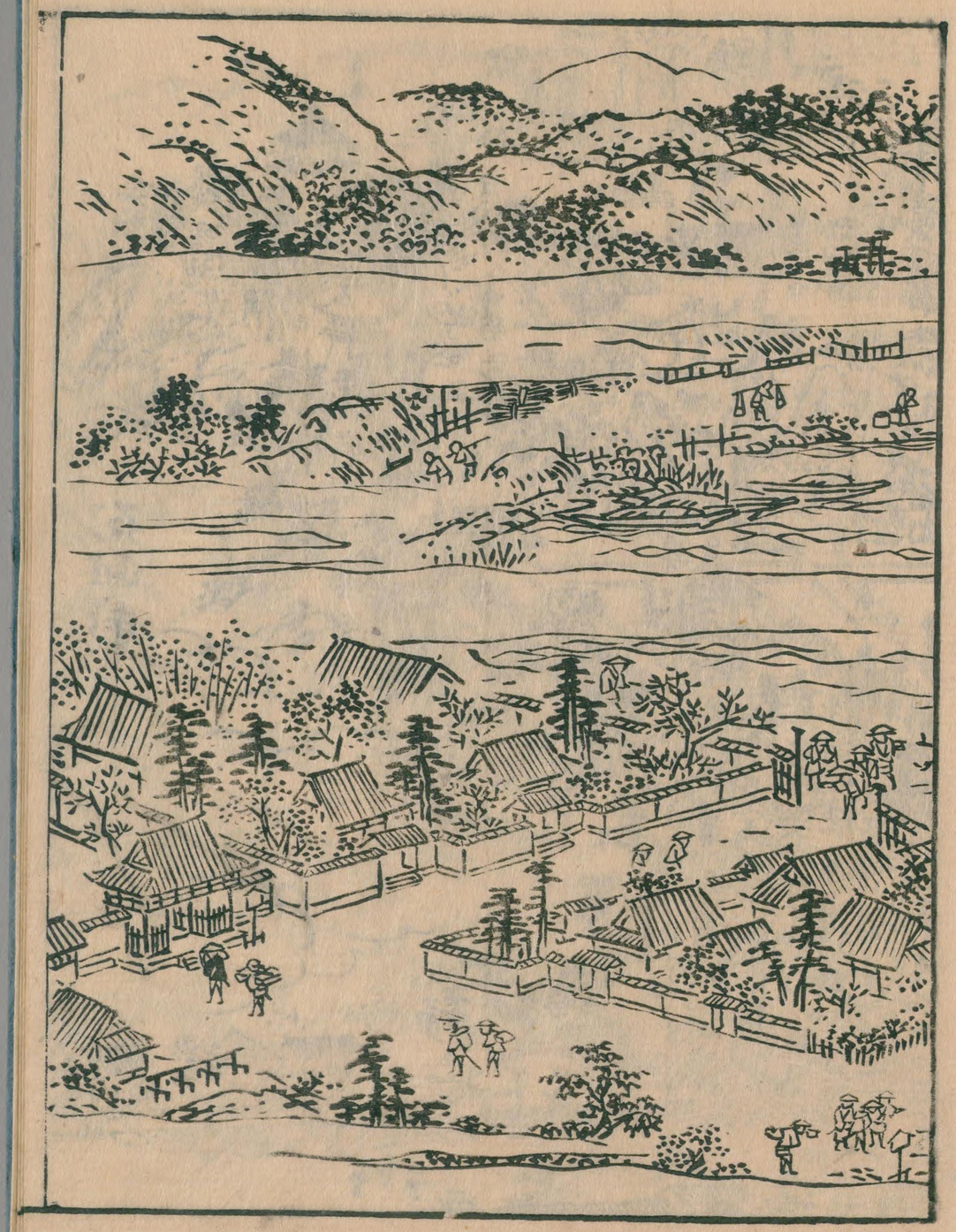
正天平勝宝六年 草創 元亨釋書曰聖武天皇 天平 寺と 創造 ゝ 絶ゝ十六
ゝの金 紙 ゝ ゝ 絶 ゝ 山 寺 年 那 仏 ゝ 美 金 ゝ 帝 ゝ 撰 ゝ き 敬 惠 ゝ ゝ 絶 ゝ ゝ 像 ゝ
良 弟 ゝ 絶 ゝ 如 ゝ 金 ゝ ゝ 金 剛 羅 王 拾 現 ゝ 金 の 資 ゝ 行 ゝ 求 ゝ ゝ む 拾 現 ゝ 中
ゝ 若 て 日 此 ゝ の 美 金 ゝ れ 得 ゝ せ ゝ ゝ れ ゝ 今 汝 ゝ 別 方 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
如 ゝ 輪 観 音 の 自 在 霊 應 の 地 ゝ ゝ 紙 ゝ ゝ ゝ て 拾 ゝ せ び 必 美 ゝ 紙 得 ゝ 師 郎
勢 田 ゝ ゝ む れ ゝ ゝ ゝ 大 石 ゝ ゝ 美 ゝ と 弱 ゝ 弱 ゝ ゝ り 良 弟 ゝ 紙 行 ゝ ゝ と 同 ゝ 弱 美 て 杖 ハ 光 山 王
法 良 明 神 ゝ ゝ 此 地 観 音 の 霊 區 ゝ と 若 ゝ ゝ て 再 び 石 ゝ 僧 正 ゝ ゝ ゝ ゝ 其 ゝ 石 ゝ ゝ 感 を
拾 ゝ て 如 ゝ 輪 観 音 の 像 紙 安 ゝ ゝ て 拾 備 を 日 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 奥 弘 ゝ ゝ 黄 金 紙 献 ゝ 澤
武 都 感 感 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 石 ゝ 紙 走 ゝ ゝ ゝ ゝ 其 ゝ 地 基 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 天 ゝ 宝 澤
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

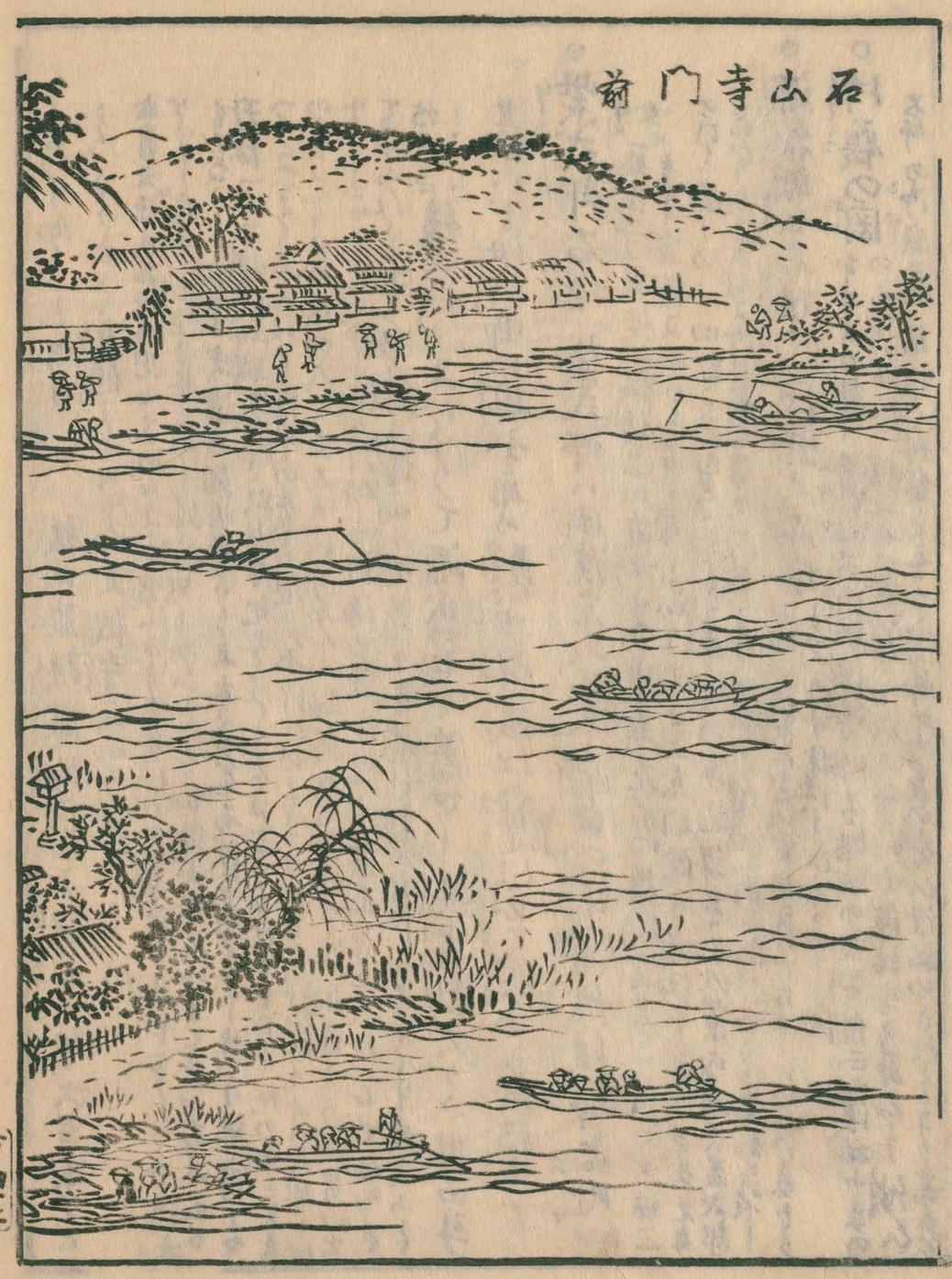
橋谷堂

小川勝因の搦
車い供沖ら流
そ九二十八町
甚弓と羅
九十出
衆星の光まぶ
聚
水上人家の
まで
白玉のごし芝垣
の後又日より畫至
の後又日より畫至
九十又日のうち盛り
小暑の
川
沿
密
宗会戦

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

とゝ〜出〜くと云り
こゝ〜云〜寺納〜る今ゝ彼寺ゝすゝめあり云
或書云源氏拙語ハ児女子のロゝ喝〜ゝ〜やゝ〜いゝ〜紫式
げ〜〜文学ゝ作の物ゝ〜ゝ〜ゝ〜





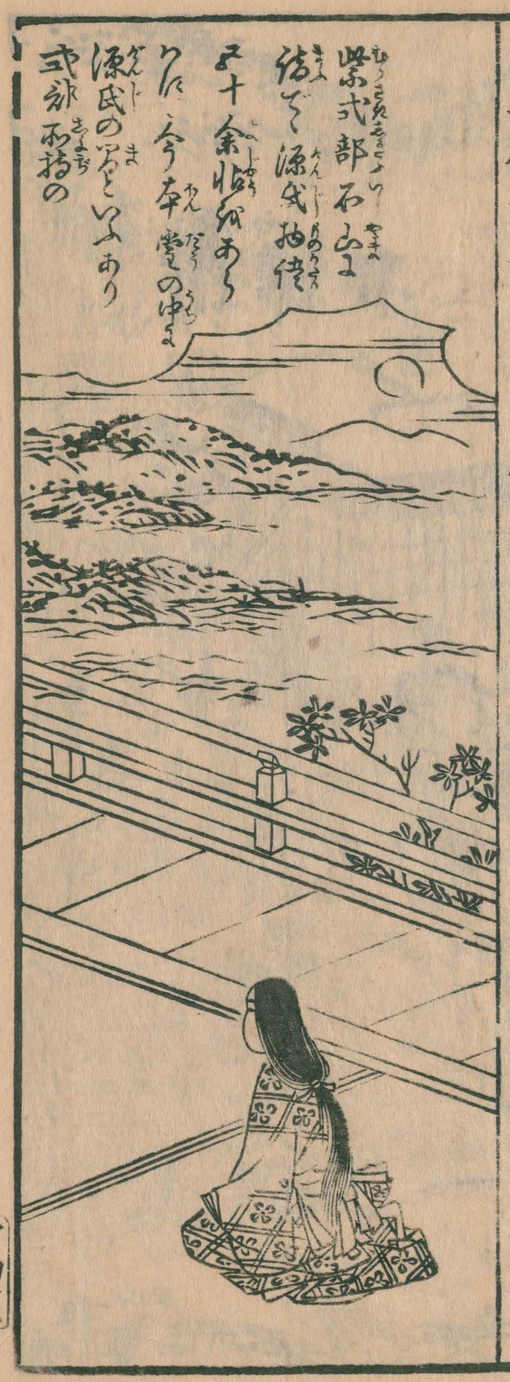
国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

紫女七論標題云

才徳兼備　式部が才を賞し、又拙作の中にもつとも心を
七事共具　つくる名の学者なる二つの初に、して強用三つに音楽うまれつき巧なる
修撰年序　眼の肥える五つに時代中業を経く文筆ゆるる六つに法華の名匠を経
文章無雙　歴せし七つにまた鄙の名うの通ぜ
作者本意　此紫女の一作なるべきを論ず
一部大事　他の拙作の所をまぬかれ三国時風系宮部田部金之国務表傷ゴ
正傳説誤　なるもの使ふべし、世態をのべ風倫して勧善懲悪の意を論ず
　　冷泉院の時のことなれば異説あるべしと論ず
　　この拙作の治拾遺に入れ時が推量こまうるべきをむしろ
　　つくさせざらぬ説撰とするとあげて論ず

紫式部石山に
籠て源氏物語
五十余帖を
作り今本堂の中に
源氏の写と云あり
或説に云ふの



現又画像あり土佐光起
の筆と今その絵を摸して
ちらに置き償河を迎紅
葉伝基の侍筆と

題龍樹四門

有門空門亦空門
非有非空門

式部詠二首

ものいはぬ身のみか
　　叶ふらん
ひとりもたれも
　　しらぬ
後の世ふなりうへて
　　うんかれら見し
あらはさしをぬ
　　かみされも

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

特1
274

從て墨跡をもるせる公自ひの聖敬しらふ寺にあり清祐の經歷刻れる人ちり
此所一ヶ所一ツを洗せ一ヶ所一ツ序驗の國しらふ紙一ヶ所ひの聖敬しる
例の僧の妄說なるべし

○龍宛の池 本堂の西南にあり畧のごとく拙者よ
雨を受ばるるに池あり昔醫海和尚とふ人此石の上に座して讀
經せし龍宛の池の水にあり其名あり

○醫海屈掛石

○弘法大師剃髮の名号○式部自筆の大般若経 硯石○清祐自ひ
の聖敬 皆寺宝とふべき
都にも人や結ん石ゝの苔よのこゝろ秋の夜の月 長能

○摘谷の瀧 勢田川旱水の時 茂原公條
今よみ是天智の朝より百濟の移民
山の下にて今ゝ伏の紀切ゝ所なり
たてるや摘谷よりわたる浪もあるさく宮居の網代木
○ゝ所にて宮居川も湖水の事なり勢田上摘谷紙ゝ宮居の網代木

○悪源太義平ヶ塚 本堂の西ゝ中ゝあり 義平ハ源義朝の嫡男ゝて十三歲
平治の戰ひに異なる勢ひ出もなく敗北して逃ゝ
石ゝ所ゝ捕られ六条ゝ河原にて雜波三郎ゝ首を切られる時
見ゝ出ゝ所ゝ義平の靈雷とゝて雜波三郎を

松下 江村の東を指て命ゝ 此村の東南ゝ町ゝ森ゝ天王社座也

○猿民社 一説ゝ防祝の社ゝ天王の裏ゝ細画ゝ記也

蒔繪松 三津浦と江村との松原をゝ金蒔の如ゝ名ゝ

ゝ浦の眞ゝ松ゝ

大中臣 弘

系譜記曰 江寺より禁の浦ゝ出て眺望ゝ小曲渚波を隔て彼の松樹ゝ画ゝ
ゝ青ゝ蒔絵の松ゝ人ゝ推ゝ問ゝ
浦松似畫夕陽裏 老眼摩挲費苦吟 水自細流列天心 雲晴雲起山
高下 潮去潮來月淺深 六十余年漂泊處 江湖風景不知今

○蒔繪明神 江村より三町程南の林中ゝ社あり江神社とも
ゝ内宮神樂ゝ此所名公唱

此余ゝ海巡り無國の上ゝ此路の大藻を記ゝ
旅人の紀ゝ此ゝ江ゝ村ゝ合より三津江村と
ゝ二ゝ清渚高城大湊川渡ゝ海ゝ
を借て名ゝ渡ゝ此ゝ名ゝ
後道ゝ

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用